

氷華集

2025年9月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

蓮浮葉水玉ふたつ空ふたつ	福のり子
夏めくや変形菌の昨日今日	齋藤亜矢
渾身の体当りにや鮎の傷	朝田玲子
陶祖の碑あり万緑の音羽山	谷口文子
丁寧にたたむ朝刊沖縄忌	有岡萃生
土地の名に水の名残る蜻蛉かな	鈴木大輔
群島へ高速艇よ南風吹く	小嶋和
天気図の絵柄の切手迎へ梅雨	加藤剛
マンゴーの落つれば子らの走り寄る	大石高典
潮の香のふふむ風あり梅雨晴間	津嘉山典
万緑や加茂の源流祀る寺	片山旭星
行灯を回せば羽蟻動き出し	牧田満知子
空海の岩屋にかかる夏怒濤	田中白秋
猫の伸ぶ主も伸ぶる夏座敷	碓氷芳雄
浅間神社茶屋の一息一夜酒	丹羽康夫
綴葉装書庫に匂へる梅雨入かな	福江ちえり
戻り道の闇やはらかし蛍籠	田崎セイ子
訪なへば玄関に待つ素足の師	伊東弥生
直会の酒の香に和す茅の輪の香	片岡和子

氷室集

その瞬間見定め逃ぐる山棟蛇

福田将矢

井戸掘の男ごとりと三尺寝

大石高典

五線譜のごと蔓薔薇の垣根かな

宮坂美緒

せはしなく暮るる日数よ牛蛙

寺川貴也

阿闍梨さま京へ降り行く青葉道

昌山瑠美子

爪の色とりどり素足投げ出して

小罵 和

土器投げ海へ迫り出す濃紫陽花

朝田玲子

茄子苗にやうやう小さき一番花

福のり子

川蜻蛉川を離れぬ川の風

鈴木大輔

柏手にぴたりと止んで河鹿笛

鳥居裕子

日覆の下に暇なく自転車屋

有岡萃生

青梅の重たき程の青さかな

中村淳子

湿りある貴船の茅の輪潜りけり

柳堀悦子

薫風や永字八法くりかへす

津嘉山典

帰去来と老鶯を聞く異郷かな

加藤広文

叢に紅を差したる梅雨茸

石上敦子

風荒ぶ町の外れや梅雨の月

加藤 剛

夏至の日の門扉に水を荒使ひ

福江ちえり

起業家の声よく通る半夏生

佐藤慎一

風薫る比叡を望み鞍馬寺

片山旭星

氷華集

2025年8月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

畏るるは全かりける蛇の衣	福のり子
パセリ苦し明日退職を告ぐと決め	有岡萃生
蛇の子や水引ほどのとぐろ巻き	齋藤亜矢
掛替ふる節句の軸や薰衣香	朝田玲子
台湾の旅へ早めの更衣	小 瀧 和
ぐんにやりと釣針を曲げ菜種河豚	大石高典
雑草と言はずわけても母子草	谷口文子
琉球のしきたりにあり噴井あり	津嘉山典
あしたには月の雫や藤垂るる	田中白秋
八代目を一目と日傘埋めつくす	牧田満知子
吾の生家は子の生家なり夜の新樹	鈴木大輔
軒端まで来てゐる蜂の脚長し	加藤 剛
ハンカチの木の花そろと押し花に	富沢壽勇
スカラベのピアスの青さ夏来る	福江ちえり
魚焼いて五月の空を汚しけり	片岡和子
原爆の子の像の辺に薔薇の風	田 中 勝
新緑の波や通勤バスの風	碓氷芳雄

風薫る嵯峨野の奥へ石畳

片山旭星

新緑の香りをつれて帰宅せり

石原ゆき子

氷室集

蟻の巣の間取に住んでみたきとも

有岡萃生

桜桃の熟れぐあひ待つ鳥と吾と

朝田玲子

降り立てば蛙合戦関ヶ原

昌山瑠美子

階へぼつりぼつりと青時雨

宮坂美緒

武者人形再び飾る日の来たり

鳥居裕子

行者大蒜つんと香のたつジェノベーゼ

福のり子

御輿入のかしらは絹の法被着て

小畠 和

卯の花の零るる雨後の小道かな

谷口文子

日中を春告鳥と過ぎしけり

加藤 剛

悠然と暗き茂みへ春の鹿

寺川貴也

仏桑花印度更紗の店の前

石上敦子

風と光とけあふ夏の渚かな

津嘉山典

峰々の雪形のみな失せてきて

加藤広文

茶農家の一と日仕舞ひの新茶かな

伊東弥生

夏近し海岸線を走る汽車

片山旭星

学生のカタカナ氾濫新樹光

福江ちえり

陽炎を抜け出て終の札所かな

田中白秋

熱の子に枇杷熟るる窓閉ざしたり

鈴木大輔

田植して若狭は空も潮ぐもり
薔薇挿さむ笏谷石の青き壺

中村 淳子
坂 利美

氷華集

2025年7月の雑詠から尾池和夫抄出

朧夜の父命日の竜頭巻く

福のり子

水中の泡は縦巻き渦見船

朝田 玲子

水田の中の古墳や花盛り

齋藤 亜矢

藪影にボールがひとつ春の雨

加藤 剛

青鰻をてつぱいと書き京の店

小 寫 和

車屋の落ち合ふ枝垂柳かな

有岡 萃生

茶畑へ覆ひ懸けたり風なき日

中島 冬子

重ねたる酒樽六つ春の風

田中 白 秋

春あけぼの一番鶏のこゑ長き

津嘉山 典

鎧戸の重き昭和の日なりけり

鈴木 大 輔

遠足の列や二の丸三の丸

福江 ちえり

銭湯の主も老いたり目借時

大石 高典

わらび摘む子の歓声も籠に入れ

田崎 セイ子

立ち上る護摩の炎の梅若忌

富沢 壽 勇

胸を張り桑名の産と蜆売

谷口 文子

葬儀屋と知らず軒端へ燕の来
春の日や花びら色の砂糖菓子
被爆の無念込めし筆墨春の雪
名を添へて飾る野の花あたたかし
一生はあつといふ間よ山笑ふ
廃線の碓氷峠や草青む
焼きたてのパンの香こぼす花の雨
先頭の鈴に癒され遍路道
焼き立ての食パンちぎる花の昼
シードルの泡のはかなし三月尽く
若武者の腰に水筒春まつり
山門へ響き合ひある遍路鈴
自作なるメビウスの帯春ともし
霧島の桜の向かう桜島
雲の影雲より速し山笑ふ
卵よりつんと飛び出す蛙の子
やんややんやと西大寺大茶盛
白詰草踏まれて強し赤子泣く
春や春海抜ゼロの貨物駅
石くれを光らす雨や桜草

河村純子
片山旭星
碓氷芳雄
伊東弥生
氷室集
福のり子
朝田玲子
宮坂美緒
鳥居裕子
小畠 和
大石高典
伊東弥生
田中白秋
加藤 剛
寺川貴也
有岡萃生
小堀恭子
丹羽康夫
河村純子
細見昌代
鈴木大輔

春昼や方丈前に笠二つ

石上敦子

釈奠や樹林真中の孔子像

富沢壽勇

蜆買ふ蜆好きなる子がひとり

谷口文子

剪定の松の香るよ城の門

福江ちえり

氷華集

2025年6月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

金碧の鹿の瞳や猟名残

齋藤亜矢

キジムナー隠れし大樹鳥雲に

大石高典

億年の進化のかたち水草生ふ

朝田玲子

身ほとりに耳済ましゐる春の闇

小寫 和

まんまるの神馬の草履山笑ふ

伊東弥生

田楽や客を同志と呼ぶおやち

有岡萃生

島人に海峡閉ざす春疾風

片岡和子

角帽を投げ上ぐるこゑ風光る

碓氷芳雄

山寺へつらつら椿つらつらと

中島冬子

如月や山に色濃き尾根の筋

加藤 剛

失せ物は失せしままなり野蒜摘む

鈴木大輔

無くなりし迷子放送梅若忌

河村純子

初鰹迷悟の笠を脇におき

田中白秋

御神木のしめ縄白し春日差す

片山旭星

無鄰菴の馬酔木や陰のどつしりと

谷口文子

揚雲雀砲は大地を揺るがしぬ

牧田満知子

工場の昼を灯して残る雪

福江ちえり

足裏へ地熱伝はる木の芽時

津嘉山典

五体投地振動直に修二会かな

丹羽康夫

日に三度ぜんまいを揉みまた干して

鳥居裕子

多喜二の知らぬミモザを仰ぎ志賀旧居

宮坂美緒

寒戻るパンダグラフの火花かな

大石高典

日曜や湯殿の窓の暮れかぬる

朝田玲子

樹冠より響く雪解け間近なり

加藤 剛

寒明の山ことさらに尖りけり

加藤広文

天平の塔にかかるる寒月光

田中白秋

石巻港の朝市若布買ふ

小 瀧 和

迷子札しつかと付くる梅若忌

河村純子

シナモンの香りの朝や春の雨

鈴木大輔

三月の歌舞伎や黒衣若きとも

谷口文子

堂の軒に音符の如き氷柱かな

松村滋子

鶏小屋を狙ふ鼬や月朧

柳堀悦子

行く春や土駄引馬の背の温み

坂岡隆司

六甲や春三日月の影深し

寺川貴也

春愁や頬杖つくによき高さ

有岡萃生

主菜にはならぬ主役の木の芽和

石上敦子

ワイシャツにほの残りし花見の香

碓氷芳雄

いかなごの不漁を嘆く魚の棚

土居郁雄

知らぬ間に龍馬に恋す菜の花忌

山本京子

氷華集

2025年5月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

街路樹に地衣のくきやか春の雨

齋藤亜矢

菰ぬちに斑ら日の揺れ冬牡丹

朝田玲子

春の宵あしたの雨の匂ひとも

小寫 和

うりずんや鍋一面のゆし豆腐

大石高典

雪沓の田の面を駆くるランドセル

福江ちえり

歯の抜けし子の駆け出しぬ風車

鈴木大輔

新雪や蹄二の字の跡を追ひ

福のり子

初蝶や遠くに光る吉野川

田中白秋

恋すてふ我が名は猫よ春の風

川村純子

清水の舞台や春の雪しまく

谷口文子

寒泉や三つ二つと泡を生み

加藤 剛

春立つや両隣よりカレーの香

有岡萃生

あぜ道に息青みけり水の春

牧田満知子

馬車道の松や離宮の風冴ゆる

片山旭星

春一番空にはりつく島の鳥

片岡和子

岩海苔や能登の隆起の岩場にも

中井昭雄

碧天へ円周ひろげ春の鳶

津嘉山典

卒業の娘の袴かかる部屋

碓氷芳雄

声高く数へて百のふきのたう

伊東弥生

氷室集

冬の浜拾ひし貝に風の音

加藤広文

立春やきのふの豆に雀の来

小寫 和

吹きさらしの地に苗札のゆるぎなく

朝田玲子

亡き人は亡き人のまま梅白し

鈴木大輔

コート買ふ名のみ春を待ちきれず

福のり子

あたたかや懷紙にほどこぼれ梅

牧田満知子

風花や手に熱すぎるココア缶

宮坂美緒

冬空の青し真白き比良の峰

片山旭星

源氏より平家が好きと春三日月

河村純子

白息や記憶の奥の大地震

寺川貴也

入学や榆の大枝天を指す

坂岡隆司

科学研究費の皮算用二月尽

大石高典

早春や山鳩は喉ふくらませ

谷口文子

収穫の港賑はふ若布かな

田中 勝

雪解水飲む猫のゐて日の高し

昌山瑠美子

水灌菜富士の恵みといただきぬ

丹羽康夫

大阪に残る寒さのはや五日

加藤 剛

涅槃図に猫をらぬわけ通訳す

有岡萃生

立春や鬼のパンツを繕ひぬ

伊東弥生

春雨の傘をくるりと金曜日

石上敦子

氷華集

2025年4月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

御降りのしみゆく能登の土赤し

福江ちえり

冬三日月きりりと疼く胸の傷

福のり子

阿弔流為の首あると言ふ冬日向

有岡萃生

寒暁や簞笥の揺れの記憶あり

加藤 剛

淑気満つ横たふ馬の深軒

朝田玲子

初旅の雲低くなり重くなり

小 崙 和

万両の赤や離宮の空広し

田中白秋

翁飾そこに年明け能舞台

河村純子

家なれどいつもと違ふ雑煮かな

齋藤亜矢

箸紙や欠けることなく名を連ね

谷口文子

初旅やうちなんちゆうの温かき

大石高典

をちの灯の小さく大きく冬の波

牧田満知子

牡蠣小屋の音や待ちゐる家族連れ

田中 勝

冬深し象舎に象の籠りゐる

碓氷芳雄

鯛焼や散歩がてらに寄る屋台

中井昭雄

爛酒を酌む後書を読み終へて

片山旭星

狐面の稽古を重ね里神楽

富沢壽勇

冬麗の月を残して星去りぬ

津嘉山典

恵比須大黒大漁の初神楽

丹羽康夫

氷室集

氷見沖へ鳶の出てゆく冬日和

福江ちえり

裸木の凜と立つとき阿修羅めく

福のり子

台湾やランタンの絵の初電車

小 嶋 和

枯芝の光に埋もれ猫は野良

朝田玲子

なかなかに鳴らぬ指笛虎落笛

大石高典

海鼠ひよいと袋へ収め露店商

鳥居裕子

去年今年味濃くなりし中味汁

福田将矢

鮫鰯の肝買ひ酒をまた買ひぬ

鈴木大輔

寒晴や母の在せば鶴折らむ

加藤広文

寒禽や土塀の続く宿場町

牧田満知子

書初の一画どれも尻上がり
幼な児のつぶやきをメモ春隣
たたなづく青垣かくし時雨雲
寒風に耐へたる幹の細きかな
熱の身の馳走はこれぞ昼の雪
飲み頃に炭酸効かせ年始酒
やんばるの島の野生のみかんとや
山眠る杉の木立は色淡し
小正月と留学生におぜんざい
母いつもの手際によさや七日粥

有岡萃生
伊東弥生
津嘉山典
加藤 剛
河村純子
丹羽康夫
昌山瑠美子
片山旭星
谷口文子
宮坂美緒

氷華集

2025年3月の雑詠から尾池和夫抄出

寒月と声交し合ひ一人旅
束の間の夕日や小歩危駅の冬
しはぶきはコソコソと言ふ森の民
おかぼ煮る冬至の習ひ婆ちやん子
冬日射す父の亡骸母に寄せ
夕暮の町や鼬が辻に消ゆ
夜鳴蕎麦その辻あたり曲がり来よ

氷壺集
福のり子
小 瀧 和
大石高典
中島冬子
加藤 剛
齋藤亜矢
有岡萃生

消えかかる措辞追ふ朝の蒲団かな

朝田玲子

山門を出ればこの世の天高し

田中白秋

爆弾を箸に真二つ関東煮

福江ちえり

冬の夜や遺品となりし馬上杯

片山旭星

冬の夜や少し安堵の脈を取る

河村純子

核検査室鉄扉なり凍つる朝

牧田満知子

底冷や地に十字切る無言館

富沢壽勇

望遠鏡に踏台を置き冬銀河

森川恵美子

牡蠣剥くや波形の殻へナイフの背

鈴木大輔

夫へ入浴介助を受けて冬至の湯

大野千鶴子

春待つやオスロの夜の平和賞

田中勝

肖像画のモデルに老いの秋思かな

植田清子

氷室集

登校の子は見逃さず初氷

朝田玲子

枯菊を焚く「高砂」を謡ひつつ

加藤広文

いくたびとなく降り来たり木の葉雨

加藤剛

水鳥の群れゐる塩田跡地とや

小嶋和

足跡を追ひつ逃しつ雪の獺

昌山瑠美子

おかへりと言ひ合ふけふのおでんかな

鈴木大輔

江戸普請四谷塩町寒の雨

牧田満知子

笈摺のうしろ姿や初しぐれ

田中白秋

寄鍋の湯気の向かうや父百歳	河村純子
犬の尾のゆらと飛びだす芒原	宮坂美緒
文旦をいただく仲となりにけり	有岡萃生
木版の二色に刷るも悴みて	谷口文子
冬空や触腕長き烏賊を釣る	大石高典
礼拝へ白のセーター新しく	福江ちえり
餅搗の臼に湯気立つ香り立つ	田中 勝
正月の凧や鉄橋ゆく列車	碓氷芳雄
鼓の音肅々として能始	國兼弓華
年越すや青空に魂返したり	原 順子
虎落笛寝つけぬときの部屋広し	小堀尚美
マホガニーのピアノ遺せし冬館	富沢壽勇

氷華集

2025年2月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

乾眠するとや熊虫に空つ風	朝田玲子
チャート層剥き出しの崖山粧ふ	齋藤亜矢
冬ぬくしひと間に過ぐす赴任先	有岡萃生
蓮根の十個の穴に十の謎	谷口文子
けふ無事にあること蕪の丸きこと	鈴木大輔

後継がずと言ひ捨つる子よ柿赤し
托鉢の来ること谷戸の名の木枯る
葬列や鳥の渡りを追ふやうに
煤逃の口実いまや尽きかけて
子を傘へ父は濡れ身の初時雨
風邪籠る三日ミイラとなる思ひ
立冬や紺ひと筋の水平線
樹より樹へ鳥の突き抜け暮の秋
閑かなり寄するも引くも秋の潮
冬鷗群れ来るときや能登の海
秋あかね刈り揃へたる小柴垣
鳩笛は日暮の音色暮の秋
被爆地の冬の灯し火平和賞
鋤のおと等間隔の冴ゆる朝
真ん前は闇の岬や星流る
風の棲む島や冬木の曲り立つ
虚子文学館その先の秋の浜
なほ残る渋谷の路地や石路の花
月満ちて杜に暗がり生まれけり
小春風ひねもす磯に根魚釣る

河村純子
片岡和子
福のり子
城戸崎雅崇
中島冬子
大石高典
福江ちえり
加藤剛
津嘉山典
中井昭雄
牧田満知子
片山旭星
田中勝
碓氷芳雄
氷室集
加藤広文
片岡和子
宮坂美緒
朝田玲子
田中白秋
牧田満知子

白足袋に足の冷たし能役者

河村純子

いたづらに明るき駅舎冬の暮

大石高典

鉄塔を等間隔に山眠る

有岡萃生

駆け降りる影と縛るる落葉山

鈴木大輔

間に合はぬ夜となりにけり冬支度

加藤 剛

栗踏めば縄文のこゑ聴へたり

津嘉山典

夜神楽へ面を掛けたり控室

丹羽康夫

祖母の縫ひし綿子の重さ懐しく

石上敦子

機関士一筋勤労感謝の日

山本京子

手の甲の少しひりひり冬初め

谷口文子

隆起せし奇岩に冬の落暉かな

柳堀悦子

懸崖菊百の手遣ふ菊師かな

高松房子

菰卷や庭師の太き無骨の手

幸城麗子

円空の墓つづまやか木の葉散る

小堀恭子

氷華集

2025年1月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

十六夜の火山湖に跳ね魚の音

齋藤亜矢

秋霖や椅子にたれかのゐし温み

朝田玲子

閑けさや樹海の底へ落葉道

伊東弥生

街道の先より暮れし曼珠沙華
書き込みの多き本読む源義忌
秋風や透きとほりゆく大伽藍
踏み鳴らすは秋の天狗や能舞台
茶畑の敵とばかりに零余子採る
名月を背伸びして見る心地かな
揺るるものばかりを揺らし秋の風
移住とて移民のごとし十三夜
献杯の後に間のあり秋の暮
野葡萄の触るるばかりや杣の道
影踏みに大人が興じ後の月
つちのこや腹に重たき夜食摂る
年縞に氣候變動知る秋気
道なりの等々力溪谷照紅葉
白樺や音無き道の秋のいろ
子へ宛名書く小包や柿の秋
角切られ安堵のやうに鹿の去る
かけつこに負けて山盛り栗ごはん
酔ふ友の姿はじめて星月夜
妻帰るまではひとつの秋灯

有岡萃生
河村純子
田中白秋
谷口文子
中島冬子
加藤剛
鈴木大輔
片岡和子
佐藤慎一
牧田満知子
福江ちえり
大石高典
津嘉山典
富沢壽勇
田中勝
碓氷芳雄
氷室集
河村純子
谷口文子
宮坂美緒
鈴木大輔

馬追や句点の如く本の上

加藤 広文

毒茸を齧りて学ぶことの有り

大石 高典

太蔓にてこずる夜長簾を編む

伊東 弥生

初鴨の水尾寄り添うて水月湖

柳堀 悦子

悪役の顔して林檎齧りけり

有岡 萃生

庭石のいろの覚めゆく秋の雨

朝田 玲子

雁や風吹き渡る三方五湖

加藤 剛

かやぶきの風に揺れゐる蕎麦の花

田中 白秋

菊膾苦手な子らはコロッケに

宮坂 千種

錦秋や五湖それぞれの色を持ち

田辺 美千代

絶景をもて遊ぶがに霧時雨

津嘉 山典

若狭より粕漬の着く秋日和

牧田 満知子

桐は実に風の育てる波頭

片岡 和子

秋色の切絵めくなり北の国

田中 勝

秋ぐもり湖面のごとき若狭湾

城戸 崎雅崇

ふぞろひの有りの実ふたつ御裾分

幸城 麗子